

平成24年11月20日(火)、長久手浄化センターから毎月搬出される汚泥を受け入れている、三重県伊賀市の産業廃棄物処理業者(株)クリンアースジャパンと、伊賀市社会福祉協議会へ市長が視察に行きました。その際の市長の話を紹介します。

～自分の目で見て、感じて、自分で考える～

今回、長久手浄化センターから毎月搬出されている汚泥が、どこへどのように運ばれ、どのような形で処分されているのか自分の目で確認したいと思い産業廃棄物処理業者の処理状況を視察しました。

運ばれていった場所は三重県伊賀市の山の中の会社で、産業廃棄物である汚泥に石灰や活性炭を混ぜて肥料化し、有機肥料として土へ還元している会社でした。ここでは、その有機肥料を使い牧草や白菜などを作っていました。

工場内部を見学したあと実際に、山の中にある混合汚泥肥料使用牧草農地を見学しましたが、農地へ行く途中に、ところどころ荒れた土地が目につき、やはり年々各地で後継者不足や高齢化が進んでおり、休眠地がとて多くなっていると感じました。



汚泥処理の視察後、伊賀市社会福祉協議会で、今回、会長とお話をしましたが、第2次伊賀市地域福祉計画は、約150人の地域住民が参加して作り上げたものであるということでした。伊賀市は1970年代に出来たベッドタウン地区が、特に高齢化が顕著化しているということで、現在、高齢化率が50%を超える地区もあるとのことでした。

～これからの長久手のために大切にしたいこと～

高齢化は、近い将来の長久手市にも確実に言えることです。だからこそ、今のうちから住民参加での取り組みが大切だと考えます。現在私も各課に住民の方たちと一緒に計画を考えなさいという話をしていますが、役所だけが現場を知らずにコンサルタントに任せて色々な計画を作りあげても、住民の方たちは知らない間に作られた計画通りに生活することは出来ません。地域福祉計画だけでなく、これはさまざまなことに言えると思います。

私はよく職員に「外へ出て現場を見なさい、話を聞いて思ったことを私に提案してください」「失敗してもいいから、とにかく行動しなさい」と言っています。確かに、たくさんの人たちが集まれば、遠回りで形の整ったきちんとしたものは出来ないかもしれませんが、住民皆さんにとっていいものは確実に出来上がると思います。

計画は、テープカットをしてオープンすれば完成し、そこからスタートではないのです。物事は、わいわいとみんなで活動を始めたときからもうすでに始まっているのです。

今後数十年後、本当に困った時代が来たときに、足腰が立たない環境になっては絶対にいけないと思います。高齢者の多い時代がきたときに、誰も助けてくれない世の中であってはいけないと思います。福祉部だけではなく建設部も、市民生活部も、総務部も、すべてが公共の福祉のためにあるのです。役所が住民皆さんの持つ力をどうサポートしていくかが、今後とても重要になってきます。そのためにも、職員はもっと外に出て、何度でも失敗して、住民と揉みくちゃになって、地域の皆さんに自分たちで地域を動かしていくことのできる力を引き出していくようサポートして欲しいと思います。